



## <第2回ふるさと探訪>

### ～備中高梁を訪ねて～

木口 特次（10期生）

読売はばたきシニア倶楽部の活動の一環として、第2弾が去る12月2日、一泊二日の日程で備中高梁を訪ねる小旅行に12名が参加し開催された。第1弾「松阪・奥伊勢」の後、小生の田舎をとのリクエストがありましたが、高校卒業直後から大阪暮らしだったので、我ふるさと言えど十二分に答えるだけの見識が少ないのが現状で、簡単に案内が出来そうにありませんでした。そこで事前調査を兼ねて9月中旬の台風に向かって西方の岡山に帰省しました。終始小雨と曇り空であったものの、貴重な情報と地元の優しい対応に感謝する次第です。

当日は午前10時前に岡山駅に集合とし、事前に「奨学会旗」を借用の上待っていると、44期の若い後輩が偶然にも会旗を見て駆け寄って来た。四国への出張途中とのことでしたが、会旗の威力を改めて確認できました。伯備線出雲行「特急やくも」で山間部の高梁川の裾に沿いに34分で備中高梁に到着し、山陰方面からの2名と合流しました。



事前に予約しておいた豪華ボンネットバス「ぼんばす」（トヨタ DB100:1967(昭和42)年式)が誇らしげに迎えてくれた。昭和の象徴的な「ぼんばす」は唯一観光目的の団体に無料で貸切（運転手・車掌付）運行をしてくれる情報に巡り合えたのも幸いで、遠足気分での船出となる。対向車とすれ違いが困難な細く曲がりくねった山道を、ベテランの運転手と女性車掌の案内でベンガラの町「吹屋」に到着、中心部の道路では両側から迫出す屋根の庇すれすれにバスは進み、観光客が底下に退避してもカメラは「ぼんばす」へ向けられていた。

ベンガラの村「吹屋」は、標高550mに位置し、昭和52年に伝統的建築物郡保存地区に選定され、1707年磁硫化鉄鋼からの緑礬を原料とした国産ベンガラが誕生し「吹屋弁柄」として隆盛を極めた。ベンガラの語源は、インドのベンガル地方に酸化鉄が産出し、それが流入したものである……と！

広兼邸は、映画「八つ墓村」のロケ地として二度にわたり放映され、雄大な城郭を思わせる富豪を偲ばせていた。※八つ墓村は、昭和13年の津山30人殺（現・津山市加茂町行重）がモデルである。



成羽では、明治27年の日清戦争の時、突撃ラップにより「死んでもラップを口から離さなかった」ことから武勇伝となり、尋常小学校の「修身書」にも掲載された木口小平の生家と隣接する小生の生家を案内、全員がバスを下車し手を振ると実兄が白いタオルを振り皆を出迎えてくれました。険しい山の中腹の実家から小学校までは4kmの道のりを小学校1年から歩いての通学に、皆さんの驚きと同調のような感動もありました。廃校になった出身高校を折り返し、成羽陣屋と安藤忠雄設計の美術館に立ち寄り、何処へ行っても我々が貸し切った「ぼんばす」は人気者でしたが、名残を惜しんで初日の観光を終え宿泊所へ向かう。



公共の宿「神原荘」にて宴会が始まりましたが、年齢なのか？半端な量ではないくらいの食材やお酒にも皆さんギブアップ。(昔から田舎では、客人には最大限一杯のおもてなしをする風潮がありますが、その名残でしょうか?) 恒例の部屋会(二次会)も大盛り上がりでしたが、ここでも持込のお酒が随分と残っておりまして、持ち帰るには荷になることから、小生の実兄に引取をねがうことになり、翌日実兄は電話でたいそう喜んでおりました。「ありがとうございました」

翌朝は、備中松山城に向けて…いざ出陣…乗合タクシーで8合目まで行き、ここからお城まで登山さながらの登り坂、年齢的にも厳しいものでした。ボランティアガイドさんも気遣ってか幾度も小休憩をして頂きました。山頂に着いたところで、優雅な城を目にして皆がホッと一息。

山頂(標高約430M)を中心に築かれた近世城郭を指しており、天守の現存する山城としては随一の高さに位置します。城内には天守、二重櫓、土塀の一部が現存しており、歴史的には鎌倉時代1240年に地頭として砦が築かれ、天正2年(1574年)に出丸が築かれ毛利の東方進出の拠点となり、天和3年(1683年)修築されたものが現存しており、昭和16年に国宝(重要文化財)の指定を受けている。

備中神楽は、備中地区の農村で演じられる神楽で原始的な信仰である。神代神楽三曲「天の岩戸開き」「国譲り」「大蛇退治」の3話で主に構成されている。

ちょうど参拝した時は、「大蛇退治」の中盤で、悪行をはたらいたいため高天原を追いやられた素戔鳴の尊が、櫛稲田姫を救うため、八俣の大蛇を退治するという物語。素戔鳴の尊は、櫛稲田姫を私にしてくれるなら、大蛇は義姉の仇となる。そのため謀をもって大蛇を退治すると約束し、その謀とは、毒酒を八千石造り大蛇に飲ませ、酔って眠ったところを切り倒すというものであった。

酒作りの守護神「松尾神の舞」ではお道化た身振りで笑いをさそい、餅まきならぬ竹輪まきをし、その1発目を小生がゲットできたのも、縁起の良いものであった。皆さんも土間座りや立見で見惚れ、これから本番クライマックスであったが、後ろ髪を引かれるように次へと移動せざるを得なかった。



武家屋敷では、天保年間1830年頃に建てられた旧折井邸(160石)は格式のある書院造の母屋と中庭及び資料館、旧埴原邸(120~150石)は寺院建築や数寄屋風の要素を取り入れた珍しい造りだった。

頼久寺の正面は城郭を想像させる重厚さと、小堀遠州が策定した名園は愛宕山を借景とした蓬莱式枯山水で、絶妙な石組みや大海波を表現するサツキの大刈込は国の名勝に指定されている。

最後の郷土資料館は旧高粱尋常小学校の本館で、1904年に建てられた講堂は桃山風の豪快な2重折上格子天井で、天皇陛下の写真を前に校長が終身書を読み上げた明治の気風を伝えるものであった。





最後に、今回の旅行はスケジュールが過密過ぎたのではなかったか・・・と反省をする反面、皆さんが和気あいあいと楽しんで頂けたなら幸いに思うところであります。

そうして、この仲間達は・・・やはり兄弟みたいな繋がりであると・・・しみじみ感じた次第です。皆さん本当にお疲れ様でした。そうして、ご参加ありがとうございました！！

### 【 第二回ふるさと探訪 参加者 】



竹杖に支えながら山登りを克服し、やっと「備中松山城」登城に成功した参加者！！

<敬称略・整列順>

<後列> 山崎雅視（４期）、奥田浩介（１７期）、笹谷英一（７期）、安達隆夫（１０期）、住田道徳（４期）

<中列> 二上明輝（８期）、山本政信（５期）、藤原 保（１０期）

<前列> 中村憲三（２期）、木口特次（１０期）、太田博之（１期）、村田和廣（３期）